

特集

頂点を目指せ 筑波大学ラグビー

目次

- グラビア …… 1~2
- 特集 頂点を目指せ 筑波大学ラグビー …… 3~8
- 西川副理事長紹介 …… 8
- 新しい季刊誌「茗溪」の表紙デザインにあたって 西川潔 …… 8
- 茗溪会が再び動き出した …… 9~11
- 国立大学法人筑波大学の新執行部が発足しました …… 12
- 筑波大学生・大学院生に贈る「茗溪賞」 …… 13
- 第17回茗溪・筑波グランドフェスティバル開催 新井達郎 …… 14~15
- 茗溪会の公開講座から「この春から楽しむガーデニング」 西川綾子 …… 16~17
- 第28回教職受験対策研修会から …… 17
- 第12回「顕彰」候補者の推薦依頼について …… 18
- 公開講座（基調講演と資料展示企画展）開催 …… 18
- 平成25年度 一般社団法人茗溪会 公益、共益、広報等 年間事業計画（案） …… 19
- ゆめ翔る「科学的に考えることの大切さ」をテーマに 清原洋一 …… 20
- 茗溪学園だより …… 21
- 葛飾支部の勉強会から …… 22
- 桐の葉のつどい …… 22
- 追悼録／著書紹介 …… 23
- 季刊誌『茗溪』 広告募集のお願い／誌上名刺交換掲載協力のお願ひ …… 24
- 本部だより／編集後記 …… 25

茗溪



春

2013
平成25年
no.1077



リニューアルされた追越学生宿舎



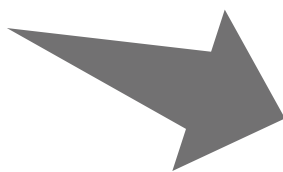
準優勝に輝く筑波大学ラグビー
(関連 3 ~ 8 ページ)

茗溪

新春特集
I 教育再生への提言
~ 高大連携から高大接続へ
II ゆめ翔る

meikei
正月
2013
No.1076

- ◆ クリア... 01
- ◆ 新年の挨拶
一般社団法人 茗溪会
理事長 江田田部 02 / 03
- ◆ 新年賀辞
平成25年 今年もよろしくお願ひいたします
03
- ◆ 新春特集 I 教育再生への提言
筑波大学理事 藤原 隆 04 / 08
筑波大学副理事 藤原 隆 04 / 08
筑波大学理事 藤原 隆 04 / 08
筑波大学理事 藤原 隆 04 / 08
- ◆ 新春特集 II ゆめ翔る
筑波大学理事 藤原 隆 10 / 13
- ◆ 第11回(平成24年度) 茗溪会の表彰(茗溪賞) : 14 / 15
- ◆ 茗溪会のつづき(公開講座から) : 16 / 17
- ◆ 世界を自慢す日本サッカー
日本サッカー協会会長 田嶋幸三
英語版茗溪の巻頭を飾ります
- ◆ 平成24年秋の茗溪
茗溪会編集 茗溪会の告知 : 18
- ◆ 茗溪のつづき : 19 / 20
- ◆ 茗溪のつづき : 21
- ◆ 茗溪のつづき : 22



表紙のデザインが
変わりました
(関連8ページ)

一般社団法人茗溪会誌

茗溪



夏

2013
平成25年
no.1078



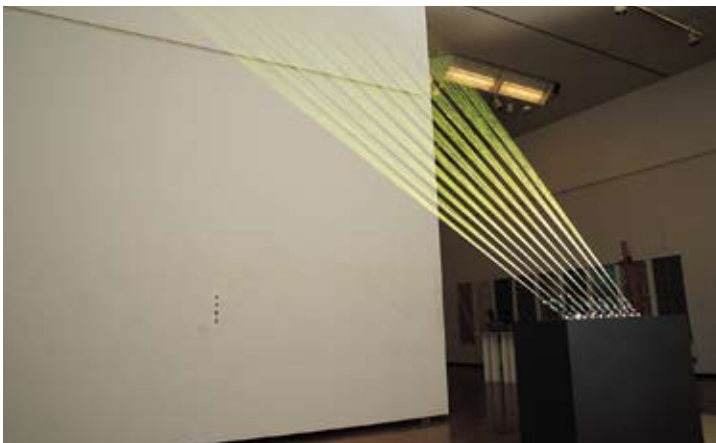


総合造形「ルーシーの後ろ髪」
 (磁石による浮遊構造・磁石 紐)
 成田 敬
 (芸術専門学群・構成専攻・4年)

日本画「両義性」
 澤田 麻実
 (芸術専門学群・美術専攻・4年)

芸術系学生対象の
 「茗溪賞」は3名
 (関連13ページ)

彫塑「北の文様」
 川村さやか
 (博士前期課程・芸術専攻・彫塑領域(2年))



公開講座「茗溪会館にて
 『この春から楽しむガーデニング』
 (関連16〜17ページ)」

頂点を目指せ 筑波大学ラグビー

～全国大学選手権で惜しくも準優勝～

平成25年1月13日、東京の国立競技場でラグビーの全国大学選手権の決勝戦が行われ、わが筑波大学ラグビー部は優勝は逃したものの、準優勝の栄誉に輝きました。

国立大学のラグビー部がこの大会の決勝戦に進んだのは初めてのことであり、しかも準決勝戦で筑波大学が大方の予想を覆して逆転劇で東海大学を破ったこともあって、決勝戦前の新聞やテレビは「国立大学初の日本一か」というような期待を込めた予想を報じていたほどでした。

そこで今回の特集は、優勝はできなかったけれど、多くのラグビーファンを感動させた筑波大学ラグビー部の活躍を振り返りながら、「強くなった筑波大学ラグビーの

秘密”を探ってみたいと思います。

話し合っていたのは、筑波大学教授・体育系長でラグビー部長の中川昭さんと、茗溪会理事長でわが国ラグビー界のトップレフリーとして、また日本ラグビー協会の理事として長く活躍された江田昌佑さんです。

お二人は、大学の筑波移転により、東京教育大学ラグビー部が筑波大学ラグビー部が変わるときに、中川さんはキャプテンとして、江田さんは副部長・監督として、東京高等師範学校以来の伝統を受け継ぐ筑波大学ラグビー部の発展のために、ともに力を尽くされた間柄でもあります。

筑波大学ラグビー準優勝までの道のり

1月13日、筑波が一つになった

江田 中川さん、準優勝おめでとうございます。優勝はできませんでしたが、東京高等師範学校にラグビークラブが誕生して88年目に、私たちの悲願であった決勝戦の舞台に立てたということは嬉しい限りです。

中川 大学ラグビーの目標は、第一に正月の2日に国立競技場で行われる準決勝戦に進むこと、そして次いで勝って優勝戦に挑むことです。しかしこれまでのわがラグビー部の歴史を振り返ってみると、準決勝戦には7回の挑戦の経緯があるのですが、そこでことごとく跳ね返されてしまっていました。

だから、今年、優勝はできなかったけれども決勝戦に出られたということは、江田さんのおっしゃるように、自分たちの悲願がようやく叶ったということ、OBの方たちも本当に喜んでくれました。

江田 決勝戦が終わった後、隣の日本青年館で開かれた激励会でも、ラグビー部の関係者だけでなく、筑波大学の先生や東京教育大学のOBそして一般のファンなど300人を超える方々が参加してくれて、筑波大学の活躍を自分のことのように喜んでくれました。

中川 決勝戦に進むことが決まった時、私のもとには東京教育大学や筑波大学の卒業生から、たくさんの励ましや喜びのメールが届きました。また、決勝戦の日の筑波大学の応援席は、かつてない数の筑波カラーのブルーのフラッグで埋め尽くされました。

「これまで筑波は母校愛が薄い」と言われていましたが、今回の卒業生や現役の学生たちの盛り上がりを見てみると、私は「どうもそれは違うぞ。母校愛はあるんだけど、今まではそれを発露する機会がなかっただけなんだ」と強く感じました。

筑波大学ラグビー部の活躍は、筑波大学が、学群を超え、世代を超えて、一体となる機会をつくったのではないかと、そんな思いを強くしています。

対抗戦で、あの帝京大学に勝って優勝した

江田 全国大学選手権の前に、関東大学対抗戦で優勝したということも、筑波大学ラグビー部の歴史では初めてのことでした。

この対抗戦では、筑波大学・帝京大学・明治大学の3大学が6勝1敗で同率の優勝となりましたが、得失点差で筑波大学は1位で全国大学選手権に出場することになりました。しかも、あの強豪帝京大学に24対10で勝つての優勝です。これは、筑波大学が本当に力をつけてきたことの表れではないでしょうか。

中川 今までの筑波大学は、早稲田にも、慶応にも、明治にも勝つことはあっても、次の試合では負けてしまうということの繰り返しでした。でも、ここに来て、ようやく同じ強豪チームに連勝できるくらいの力がついてきました。

帝京大学との試合では、筑波大学が技も力もそして選手みんなの思いも結果することができた素晴らしい試合だったのではないかと思っています。

江田 今回の対抗戦では、明治大学に負けました。これは、帝京大学との試合に臨むにあたり、いい反省材料になったのではないですか。

中川 負けた後、敗因を分析し、チームを立て直していくというのがシーズンを戦っていく



上での基本的なあり方です。

筑波大学は、早稲田との試合では26対7で快勝したのですが、明治には31対27で負けました。でも、この試合を反省材料にしてチームを立て直し、帝京大学に勝つことができたのです。

大学選手権では準決勝で東海大学に逆転勝利

江田 大学選手権では、東海大学との準決勝戦が、多くのラグビーファンに強い印象を残す試合となりました。この日は風が強く、風が試合を左右するようなコンディションの中の試合となりましたが、筑波大学は、この悪条件を乗り越え、逆転また逆転で勝利をつかむことができました。

中川 風の強い時の試合では、前半と後半で、どちらが風上になり、どちらが風下になるかということが、試合に大きく影響します。

あの試合で、筑波大学は前半が風下になりました。これが筑波大学にとってはラッキーだったと思つています。あれだけ強い風が吹いているコンディションでは、後半に風上をとっておいの方有利になると考えたからです。

江田 あの試合は、前半の21点のビハインドを背負つての後半戦となりましたが、試合の流れを見ると、筑波大学が前半から主体性をもって試合をつくつていたので、21点は重いけれど、これはいけるぞという感触はありました。

中川 前半で21点のビハインドをもらいましたが、フォワードがやられていなかった。これが救いでした。

そして後半に入り、すぐにペナルティーゴールをきちんと決めることができたということも大きな勝因になりました。

江田 後半の23分に筑波大学が23対21で逆転しましたが、ノーサイド直前に今度は相手のゴールライン付近から逆襲されて、東海大学にまたリードを許してしまいました。ノーサイド直前ですから、「しまった」と思つたのですが、筑波大学もすぐに相手のキックに身を挺してチャージをし再逆転して勝利を手にすることができ

ました。

これは筑波大学のあくなき闘志というか最後まであきらめない気力が、あのチャージに結びつき、勝利を手にすることができたのではないのでしょうか。

決勝では帝京大学に敗れ、惜しくも優勝を逃す

江田 帝京大学との決勝戦は、試合内容は相手に圧倒されていますが、筑波大学の選手はよく頑張つたと思います。あのパワーのあるチームに最後の最後まで張り通しました。特に後半の2つのトライは、選手たちの執念のプレーだったと思います。

中川 帝京大学は対抗戦で筑波大学に負けていますから、この試合では戦い方を変えてきました。メンバーも変えてきましたし、キックを一切せずに、自陣からボールを繋いで繋いで、前に前に進んでいくラグビーをやるということとでチームの意思統一ができていました。

そういう帝京大学の戦い方に対して、わが方が対応しきれなかったということが一番の敗因でした。

江田 帝京大学はこれまでの中で一番いい試合をしたの

ではないのでしょうか。フォワードとバックスが一体となつたいいラグビーをしていました。帝京大学の持ち味であるパワーを生かしたラグビーができていたと思います。

でも、筑波大学はフォワード8人の体重が帝京大学より100kg以上も下まわっていたのに、最後まであきらめないで戦つたこの試合は、歴史に残る試合となつたのではないのでしょうか。

ラグビーには「グッドウィナー、グッドルーザー」という言葉がありますが、帝京大学は立派な勝者となり、筑波大学は立派な敗者となつた。いい試合であつたということが出来るだろうと思います。

筑波大学ラグビー部 躍進の秘密

江田 ここまで筑波大学ラグビー部が全国大学選手権で準優勝するまでの道のりを見ってきましたが、では筑波大学がここまで強くなつた秘密はどこにあるのか、二人で探ってみようと思います。

筑波大学ラグビー部の選手たち

江田 まず、筑波大学ラグビー部の選手になるには入学試験という関門を突破しなければなりません。いま活躍している選手たちはどのようにして集まってきたのかというところから話を進めてみましょう。

中川 筑波大学のラグビー部には、推薦入試で入ってくる学生と一般入試で入ってくる学生がいます。一般入試で入ってくる学生の専攻は体育専門学群だけではなく、いろいろな学群から集まっています。

最近では、筑波大学でラグビーをやりたいという高校生も増えていて、浪人して入試を突破してくる高校生も多くなります。

東海大学との準決勝戦で、試合終了直前に勝利に結びつくチャージをした選手も、どうしても筑波でラグビーをやりたいといって、1年浪人して筑波に来てくれました。彼は専攻も体育ではなく理工学群です。





江田 昌佑

1955 東京教育大学体育学部卒
 1955 私立城北高校教諭 ラグビー部顧問
 1964 第一回ラグビー大学選手権決勝戦の主審
 1966 東京教育大学講師→70助教授
 66～69 74～76 東京教育大学、筑波大学ラグビー部監督
 74～75 同副部長 75～77 同部長
 この間 関東ラグビー協会 日本ラグビー協会
 で委員・役員 87～95 日本ラグビー協会理事
 1974 筑波大学助教授→77教授
 1988 体育専門学群長
 1992 筑波大学副学長
 1995 鹿屋体育大学教授→学長 2000 任期満了
 現在 一般社団法人茗溪会理事長

江田 筑波大学ラグビー部の特徴の一つに、他大学のよ
 うな合宿制をとっていないということがあります。

合宿制は、生活の管理がしやすいとか、栄養面で配
 慮ができるというメリットもありますが、筑波大学は
 東京教育大学の時から、学生の自主性を重んじ、合宿
 制はとってきませんでした。

それは、選手一人ひとりが自分で自分の生活を律し、
 自主性をもって、勉強にも練習にも取り組むことが、
 人間的な成長にもプラスになると考えているからです。

中川 筑波大学でラグビーをやりたいと考えている高校
 生は「合宿所で一緒に暮らすのは嫌だから」とか「自
 由があるから」というような表面的な動機ではなく、
 筑波大学のラグビーの良さに気づいているから、難し
 い入試を突破して入学してくるのだらうと思います。

筑波大学ラグビー部のポリシーは「自主性」と「文
 武両道」です。高校生たちも、そういうポリシーや部
 の雰囲気、先輩から話を聞いたり、試合を観戦した
 りする中で感じとり、自分もその一員になりたいと思
 うのではないのでしょうか。

ラグビーには、自主的に判断してプレーをしなけれ
 ばならない場面が数多くあります。責任を持ってタッ
 クルをして自分の守備範囲を守るといようなことは、
 日頃の生活の中から出てくる「人間的な強さ」や「人
 間的な良さ」がないとできないプレーなのです。それ
 は技術ではありません。

だから私たちは、いつも、そういう人間の基本的な
 力を身につけさせることをめざして選手たちを指導し

ていますし、その力は大学を卒業して社会に出てから
 も生きてくると信じています。

研究熱心な指導陣や学生達

江田 筑波大学ラグビー部の特徴は、指導陣も学生と一
 緒になってラグビーを研究的にとらえているところ
 あると思います。レギュラー選手も、そうでない選手
 も一生懸命にラグビーを研究していますし、研究した
 ラグビーを実践に結びつけていくということも積極的
 にやっているようにうかがえます。

こういうラグビー部のあり方はすばらしいことだと
 思いますし、ここに筑波大学が強くなった秘密もある
 のではないかと受けとめています。

中川 指導陣の中に大学院の学生が大勢いるというのも
 筑波大学の特徴です。

私も大学院の時にコーチをしていましたが、大学院
 の学生にとってコーチをすることは、自分の勉
 強であり、研究の一環でもありますから、むしろコー
 チをやるのが当たり前という雰囲気が出ています。

コーチの大学院生と選手の大学生が、お互いに研鑽
 し合うという、いい伝統が東京教育大学の時代から続
 いています。

古川拓生監督の考えているラグビー

江田 そして、最近の筑波大学がこれだけ強くなったの
 は古川監督の力も大きいのではないのでしょうか。

中川 私も、筑波大学ラグビー部がこれだけ躍進でき
 たのは古川監督の力が大きく寄与していると思っていま
 す。

先にもお話ししましたように、筑波大学はこれまでは
 強豪と言われていたようなチームにも単発では勝つこ
 とはあっても、連続して勝つことができませんでした。
 でも古川監督になってからは連続して勝つことがで
 きるようになってきました。

それは、古川監督が、「ブレイクダウン」というプレ
 ーの指導に力を入れてきた効果がようやく表れてきた
 からだとみています。

ラグビーというス
 ポーツでは、ボール
 が動くところにタッ
 クルがあり、そのタ
 ックルからまたボー
 ルの争奪が始まる
 というプレーの繰り返
 しがあります。そし
 てそのタックルの起
 こるところのプレー
 をブレイクダウンと
 いうのですが、古川
 監督は、このブレ
 ーを徹底的に指導し、技
 術的にも体力的にも
 高いレベルの力をつ
 けさせたことが、安
 定して勝てる要因に
 なったのではないか
 と思います。

そしてもう一つ、
 古川監督が力を入れ
 てきたのは、いい選
 手に入学してもらう
 ための全国行脚です。

彼は、チームを強
 くするためには、技
 量だけでなくリーダ
 ーシップのとれる選
 手を確保する必要が
 あると考えていて、
 キャプテン経験者に
 声をかけ、受験して
 もらうような働きか
 けもしているのです。

【全国大学選手権の筑波大の成績】

【2次リーグ】	
○ 61-3	法大
○ 55-28	慶大
○ 54-0	関西学院大
【準決勝】	
○ 28-26	東海大
【決勝】	
● 22-39	帝京大



福島宏治(11筑体)撮影



中川 昭

1973 東京教育大学最後の入学生として体育学部に入学 ラグビー部入部 四年時に主将
 1977 東京教育大学卒業
 同年 筑波大学大学院体育科学研究科入学 在学中はラグビー部コーチを務める 筑波大学技官
 1983 筑波大学大学院単位取得退学 筑波大学技官
 1984 大阪教育大学助手→86 講師→91 助教授
 1994 筑波大学体育科学系助教授→2006 教授
 2008～12 筑波大学人間総合科学研究科 体育学専攻長
 2012～現在 筑波大学体育系長
 1994～2004 筑波大学ラグビー部監督
 2003～現在 同 部長

筑波大学ならではの練習方法

江田 筑波大学ラグビー部の練習は、他の強豪校のように「午後、昼間から練習」というようなことはできません。いろんな学群の学生がいますから、夕方5時からの練習でも全員が集まれるわけではありません。

でも、そういう厳しい条件を乗り越えていくことができ、たくましさや育てていくことになり、それが学生スポーツの本来の姿ではないかと思っています。

そして、練習時間が少ない分、筑波大学の選手たちは短い時間で最大の効果をあげられる工夫をしているようにみえています。

中川 筑波大学ラグビー部は、グラウンドでの練習時間は少ないかもしれませんが、選手もコーチも、グラウンドの外で、ビデオを分析し、技術的なことや戦術的なことの研究を熱心に続けています。そういう努力が、いまの筑波大学ラグビー部の強さにつながっているのだらうと思います。

筑波大学ラグビー部は選手層が厚くなった

江田 最近の筑波大学のラグビーの試合を見てみると、途中で交代した選手が、予想以上に活躍しています。昔と比べると選手の層も相当厚くなっているのではないのでしょうか。

中川 関東には、2軍以下の選手が出場するジュニアリーグというのがあって、筑波大学は、かつては3ラングのうち2番目のランクのグループに所属していま

したが、去年、初めて6大学しか入れないトップラングのグループに入ることになりました。

大学選手権での筑波大学の活躍ぶりを見ると当然じゃないかと思われるかもしれませんが、そんなことはありません。トップラングの6大学とは、早稲田・慶応・明治・東海・帝京そして筑波です。各大学には筑波大学とは比較にならないくらい厚い選手層があります。

でも、筑波大学のセカンドチームは、今年、このような強豪大学にまじっても、5位につけるという結果を残しました。これは、江田さんのご指摘のように、筑波大学のラグビー部が、選手の数ではなく、選手の質で選手層が厚くなってきている証左であると言えるかもしれません。

筑波では医療体制が選手のけがを守っている

江田 他大学と比べて、筑波大学ラグビー部の恵まれた体制として特筆しておきたいのは、医療体制の充実です。医学領域の協力を得て、現役のドクターやトレーナーがいつもグラウンドにいてくれる体制ができています。

中川 ラグビーではけがが付きものです。けがをしていない選手はほとんどいないと言っても過言ではありません。

ですから、ドクターやトレーナーがいつもそばにいてくれるということは選手にとっては心強いことであり、安心してプレーに集中できる、ありがたい体制になっています。

筑波大学ラグビー部の88年

江田 こんなに強くなった筑波大学ラグビー部88年の歴史の中には、いくつかのエピソードメイキングがありました。

そこで、私たちが関係したことで、筑波大学ラグビー部にとって大きなエピソードとなったことのいくつかに触れてみたいと思います。

一番の苦難は大学移転の時

江田 筑波大学88年の歴史の中で、私が、真っ先に挙げなければならぬと思うのは、大学の筑波移転に伴う部の名称変更問題や合同練習の苦労です。

この時期、中川さんはキャプテンで、私は部の副部長・監督でしたが、東京教育大学ラグビー部を「筑波大学ラグビー部」に名称を変えるかどうかで大もめにもめました。

この名称問題は、ラグビー部だけでなく、すべての運動部に共通する大問題でした。それは、それぞれの運動部の所属するスポーツ団体がどこになるかということでもあったからです。

でも、ラグビー部は、「大学の名称が変わるのだから部の名称も変わるべきである」ということで、先輩を含めた総会を開き、他の運動部に先駆けて、部の名称を「筑波大学ラグビー部」に変更することを決めました。

ただ、大学が筑波に移転したために関東大学対抗戦に出られなくなっただけで

【筑波大学ラグビー部の歴史】

- 1924年(大正13年) 東京高等師範学校にラグビークラブが創設される。
- 1927年(昭和2年) ラグビー部に昇格する。
- 1929年(昭和4年) 東京文理科大学ラグビー部となる。
- 1949年(昭和24年) 学制改革により、東京教育大学ラグビー部となる。
- 1974年(昭和49年) 大学の筑波移転により、筑波大学ラグビー部となる。



ですから、関東ラグビー協会ともタフな交渉を続けました。

中川 あの当時、私はまだ学生でしたが、「大学の名称が変わるのだから、部の未来を考えると名称は変えた方がいい」というのが私たちみんなの考えでした。

しかし大学の筑波移転により、ラグビー部の運営で大変な苦労がありました。

東京教育大学の学生は東京、筑波大学の学生は筑波に分かれていますので、練習は別々にやり、週末に東京に集まって合同で練習をして試合に臨むということが3年間も続きました。

しかし試合になったらそんなことは理由にはなりませんから、負けないようにみんなが頑張った結果、筑波大学ラグビー部は尻上がりに強くなっていったことを覚えていきます。

国際的な視野に立つラグビーをめざした取り組み

江田 エポックメイキングの二つ目は、ジム・グリーンウッド氏を招聘したことでした。彼は世界的に有名なラグビーの指導者で、私もイギリスで指導を受けたこともあって、筑波大学ではわが国初の外国人教師制度の教員として迎え入れ、ラグビーの指導をお願いしました。

これは、若い学生諸君にできるだけ早く世界のラグビーを知ってもらいたいという私たちの願いから生まれた取り組みでした。

ジム・グリーンウッド氏は、筑波大学の英語とラグビーの教授として2年間滞在していましたが、この間に、筑波大学の学生を指導してくれただけでなく、日本のラグビーへの提言をまとめたレポートを作成し、わが国のラグビーの発展のためにも大きな貢献をしてくれました。このレポートは、いまでも私たちのラグビー研究の重要な参考資料になっています。

中川 ジム・グリーンウッド氏が筑波大学で指導していた時、私は大学院の学生で、ラグビー部のコーチをしていましたが、ラグビーの見方について目を開かしてもらいました。

彼のラグビーに対する見方や考え方は固定的ではなく、「こんな見方もある」「こんなこともできる」というように、ラグビーを柔軟に考えるよう教えてくれました。

筑波大学のラグビー部が常に新しいことに挑戦していく体質を身につけたのは、ジム・グリーンウッド氏の力だと思っています。

江田 その後、ジム・グリーンウッド氏の教え子のジョン・カー氏が招聘され、9年間もラグビー部の面倒を見てくれました。彼の功績で一番大きいのは4回の海外遠征のために尽力してくれたことだろうと思います。

中川 ラグビーは外国の文化です。外国人が柔道を学ぶために日本に来るように、本当のラグビーを知るためには本場に行く必要があります。

外国人と試合をすることにより「ラグビーとはこんなスポーツなんだ」ということもわかってきます。

そのため、ジョン・カー氏には4回の海外遠征（オランダ、イングランド、ニュージーランド、カナダ、アイルランド）の計画を手伝ってもらい、学生たちが国際的な視野に立つラグビーを学ぶ機会を作ってもらいました。

この海外遠征は、選手一人ひとりのラグビー観を高めるだけでなく、チーム全体の力量を高めたということでも大きな成果がありました。

大学のグラウンドが整備された

江田 三つ目にとりあげたいのは、大学のグラウンドが整備されたことです。

大学のグラウンドは、開学の最初は芝が張られていたのですがすぐだめになってしまい、一度張り替えられたのですが、筑波のからっ風と霜柱でこれもすぐにだめになり、長い間、土のグラウンドでの練習が続いていました。

それが、3年前に大学の好意で、ようやく土のグラウンドが自然芝と人工芝のグラウンドに変わることができました。

このグラウンドが整備されたということも、筑波大

学ラグビー部が大きく躍進するきっかけになったのではないかと思います。

中川 ラグビーは、地面に倒れる頻度が高めのすごく高いスポーツです。草の上だから、あれだけ激しいプレーができると言えます。

土の上で練習をしていた時には、例えばボールが転がって奪い合いをする場合でも、どうしても飛び込むスピードが遅くなっていました。

それが芝のグラウンドができたことにより、自然とボールに飛び込むことができるようになってきたように思います。

筑波大学ラグビー部が頂点をめざすために

江田 最後に、筑波大学ラグビー部が、これから頂点をめざしていくためにはなにかが求められるかという話に進みたいと思いますが、中川さんは現役の部長として、どのようなことを望んでいますか。

中川 ラグビーというスポーツは、防御と攻撃に分かれて試合をしますが、防御というのは技術的にはそんなに難しいことはありません。防御面で大事なものは、チームに対する責任感とか、倒れてもすぐに立ち上がり相手に向かっていく勇気とか心の強さです。つまり、人間的な問題が大事だから、そこを強くするよう、いつも選手たちに求めています。

筑波大学ラグビー部のディフェンスの強さというのはそこにあるだろうと思います。

そして、攻撃面では先ほども言いましたが、プレイクダウンのプレーが古川監督の指導のもとで、飛躍的に伸びたので、これをベースにして、相手が試合中に「次は何をやってくるのか」と不安になるぐらい、新しい戦術を常に考えていってほしいと思います。

防御面では人間性に根ざした強さがあつて、攻撃面では常に斬新な戦術を手に入れている、そういうラグビーが筑波大学のめざすラグビーではないかなと思っています。

江田 私は、昔から学生を指導する時に、いつも「すば

西川 潔 副理事長に就任



1969年東京教育大学教育学部芸術学科構成専攻卒、71年同大学院教育学研究科修了。87年筑波大学助教授、95年同教授。2002年同芸術学系長を経て04～09年芸術専門学群長、03～05・10～13年ブライトン大学客員教授。09～11年筑波大学副学長。専門は視覚伝達デザイン。日本デザイン学会理事、基礎デザイン学会理事を歴任。著書に『ヨーロッパ伝統の看板』、『英国のビレッジサイン』、『サイン計画デザインマニュアル』、『屋外広告の知識』他。現在、筑波大学名誉教授。博士（デザイン学）



新しい季刊誌「茗溪」の表紙デザインにあたって

西川 潔

長年、馴染んで来た紫色の本誌表紙を、新体制の刷新にあわせて、変えることになりました。

ご存知のように、これまでの表紙は茗溪会及び大学のシンボルカラーである紫と、桐の文様、並びに茗溪に因む水を、和のテイストで構成したものです。

この度の刷新では、イメージを全会員、関係者に伝えるために、まず刷色を4色のカラーに変え、かつ毎号表紙の写真を変えたいと思います。

具体的な情報を届ける重要なスペースとして、写真部分を活用すべきと考えました。各地の活動を端的に示すものや、偉大な会員の肖像シリーズ、学生の活躍スナップなどアイデアは尽きません。読者や学生も参加できる季刊誌になればと願っています。

改訂第一弾は、本号はキャンパス南に位置する追越学生宿舎です。芽吹き春や紅葉の秋を思いつつ、小生が色彩計画をしたものです。

学生宿舎は現在リニューアルの第三期に入り、それにあわせて外装も順次新しくしています。管理はもちろん一般財団法人筑波学都資金財団がしております。これを機に会員の皆様と共に茗溪会誌の拡充に微力ながら協力できればと考えております。

らしいラグビーで勝て」と言ってきました。すばらしいという言葉が省かれたら、勝つためには手段を選ばないという、いびつなラグビーになってしまいます。「チームが一つになって、すばらしいラグビーで勝つ」それを求めていくのが学生のスポーツだと思っています。

それから、最近気になるのは「ラグビー精神」という言葉を聞くことが少なくなったことです。私たちの若いころは、「ラグビー精神にもとるようなことはするな」ということを、耳にタコができるくらい聞かされました。

ラグビーは、数多くのスポーツの中でも特にジェントルマンのスポーツと言われています。「フェアプレーでやれ」——それがラグビー精神なんです。

毎号「茗溪誌」を楽しみにしている老茗溪人です。現職を離れた今、大きな楽しみの一つは、筑波スポーツの活躍です。今年、昨年と「ラグビー」女子「女子駅伝」「硬式野球」の躍進は素晴らしいものです。ことに「ラグビー部」の大奮闘は特筆に値しましょう。この素晴らしい成績が誌面の片隅にでもと、漢詩を賦して選手諸君、指導陣、関係者に捧げます。

原 正（35総合農学字）

樂羅式蹴球全日本大學選手権準決勝戦

開催平成二十五年一月二日、於國立競技場
母校筑波大學依大逆轉得勝利東海大學。

激露決戦只神知
奮闘走奔不許追
一喜一憂還得喜
勝歸勇士好雄姿

げきらい けっせん ただかみ
ふんとう そうほん にお ちる
いっさいちゆう ま よろこ
か え ちゆうし ちゆうし

激露の決戦 只神のみぞ知る
奮闘 走奔し 追うを許さず
一喜一憂 還た喜びを得
勝ちて帰る勇士の 好雄姿

原 正軒

平成二十五年一月二日（上平聲四支韻）

茗溪会が再び動き出した

茗溪会

明治維新後の日本は、国家の近代化を進めるためには、その指導的人材の養成から始めなくてはならないと思いたった。

明治5年に官立の「師範学校」を、東京・お茶の水の江戸幕府の昌平黌跡に創設し、茗溪創基を見た。

その約10年後には、同窓生有志の手で同地に同窓会として「茗溪会」が組織された。

しかし、国家的な規模でわが国を襲った時代の嵐は数度にわたって、わが母校の存続をも危うくすることとなった。

先輩たちはその嵐を、悲壮な覚悟と行動力によって潜り抜けてきた。先輩方のその思いはいまに歌い継がれる“宣揚歌”の歌詞に強く読み取れる。

その潜り抜けた結実の証しとして、指導的人材養成の場・高等師範学校を母体に、東京文理科大学を生み、教育、農業、体育の専門分野の指導的人材養成等の諸機関を併せて、その本拠地を東京・大塚を経て筑波の地に移した。そして、前例を見ない大規模な総合大学を持つに至った。

また、明治期にあって3度、25年にわたって校長職にあった嘉納治五郎の壮大な構想により、体育・スポ

ーツ等の近代化をはじめ各方面の改革が図られた。

また、明日の母国の指導者となる各国の多数の有為な若者たちを留学生として迎え入れ近代教育を学ばせた。

留学生はその学び舎を、私たちと共有する“知と心”の故郷として世界に巣立ち、それぞれの国の指導者としての位置を得ている。

茗溪の水や桐の葉は、世界に広がったのである。

留学生を受け入れる方針は、筑波大学の重要な経営の根幹の一つとして、いまに至っており、その拠点世界に拡げている。

日本から、私たちが世界の各地に赴いたり、各国から同窓が来日すると、同窓生によって積極的に歓迎され“同窓会”が開かれるようになって来た。「世界各地に茗溪会の“支部を”」との声も聞こえてくる。

同じ青春の血を沸かせ“天下”を語り、その知と心の世界の共有を図り合った者同士が同窓として繋がり、学業を離れ社会の一員となってからも、同窓生は世代を超え職業を越えて強い靱帯によって結ばれている。

いま、新しい法人となった“茗溪会”は、この機会を捉えて、足元からの見直しをして、多くの同窓生を始め関係する人々の期待に応えるために、再び動き出した。

『茗溪会拡充キャンペーン』推進のため！

茗溪会は平成24年4月から「一般社団法人」として再出発しました。

従って、従来の公益目的事業活動に加えて、今まで以上に「同窓会」の機能、活動を強めていくことが可能となりました。

茗溪会は、長い歴史と伝統に支えられ、また同時にその間にあつては、幾多の危機的情勢をも乗り越えてきました。

先輩たちが流された多くの汗を私たちの糧とし、そのエネルギーを貴重な財産として、さらなる発展を図るために、このたび理事会内に「キャンペーン実行委員会」を発足させ、『茗溪会拡充キャンペーン』を推進することにいたしました。

「茗溪会拡充キャンペーン」の柱

- ① 同窓会としての互助事業の充実
- ② 公益目的事業の充実
- ③ 大学への支援事業の充実

この三つの柱を達成するために、「世代をつなぐ事業」と「地域・職域をつなぐ事業」の一層の強化に取り組むことにいたしました。

(委員長・井口武雄副理事長)

新しく実施する事業の内容

【世代をつなぐ事業】

一・筑波大学の学生と大学院生への支援を強化します。筑波大学の学生、大学院生の就職環境も一段と厳しさを増しています。そのため実社会で活躍するOBとの連携を強化します。

教職をめざす学生のためには、これまでも「教職受験対策研修会」を実施してきましたが、あらたに受講料の一部を補助することにいたしました。

また、茗溪会では、社会貢献活動を行っている学生に対する顕彰、優秀な芸術作品を発表している学生に対する表彰を行っています。これに加えて大学院生の社会貢献活動も茗溪会顕彰の対象に加えることといたしました。

さらに、茗溪・筑波グラウンドフェスティバル、学園祭等への支援も強化いたします。

二・「茗溪フェロー」の制度を創設します。



関東地区の支部長(会長)懇談会にて

この制度は、すでに会費を完納した会員に「茗溪フェロー」として寄付を仰ぎ、今後も会の運営に寄与していただくことをお願いするものです。ご協力いただいた方には感謝状・記念品などを贈呈する予定です。

【地域・職域をつなぐ事業】

一・地域の組織を強化します。

各地域とも、若い会員の入会が少ないということが共通の課題になっています。そこで会員を増やすための先進支部の取り組みを全国規模に広げ、各地域の組織拡充を図り、茗溪会の総合力を強めます。

二・職域の茗溪会の組織を拡大します。

筑波大学が誕生して40余年が経過し、最近では、卒業生の多くが教職よりも一般企業に進むようになっていきます。そこで、これまで以上に一般企業で活躍する仲間とのネットワークを広げていきます。

三・地域・支部活動等に対しての支援を強化します。

これまで各支部に対しては、集金手数料の還元と公開講座開催への支援等に限定されてきましたが、今後は支部に所属する会員からの年会費納入者数に応じて、一定の割合の額を支部に還元いたします。支部活動への強力な支援となることが見込まれる一方、支部による会員に対する納入促進が図られることが期待されます。そのため、会員の所属支部を明確にする必要があります。本部・支部の連携・協力が今まで以上に必要となりますのでよろしく願います。

活動を前進させるための取り組み

関東の都県から選出された理事を出している支部の支部長(会長)懇談会が2月7日に行われました(写真)。

席上では、それぞれに取り組んでいる各地域での活動等が報告され、協議や意見交換がありました。

この懇談会には、神奈川茗溪会の清水進一会長、千葉支部の秋山尚功支部長、埼玉支部からは荒井修二支部長、東京中央支部の中村頼司支部長、東京新宿支部の浅井一郎支部長代理が、本部からは江田昌佑理事長、井口武雄副理事長、西川潔副理事長、高野力組織委員長、大勝信明公益・広報等委員長及び川田孝一理事、田中正造常務理事(事務局長)が出席しました。

地域・職域の活動

【神奈川茗溪会】

① 支部総会出席者の拡大に向けた取り組み

平成21年度に、本部の会員名簿をもとに、教員のみでなく、公務員、企業を含めた県内在住者約2000名の会員に案内状を発送。また、総会には日本サッカー協会副会長 田嶋幸三(筑波大学出身)さんなどを招き、講演会を開催。総会出席者も教員以外の参加者の増加を見た。

② 「茗溪かながわ」の創刊

総会案内状を出した会員2000名に対して、総会の報告や神奈川茗溪会の活動をお知らせするために機関紙「茗溪かながわ」を発行している。

③ 教員をめざす筑波大学生のための支援

神奈川県の教員をめざす筑波大学の学生のために、教科別の担当者を設置し、一次試験のための助言、指導を行うとともに、一次合格者に対する二次試験対策講座を実施している。

【愛知支部】

① 会員の拡大と総会出席者を増やすための取り組み

職場、地域、競技団体(連盟、協会、部活動)などを通じて、まだ茗溪会に入っていない同窓に対して、入会の勧誘に努めている。

また、支部総会への参加者を増やすため、魅力あるゲストを招いての講演会を実施している。

② 筑波大学生への支援

筑波大学の学生が、後輩たちの部活動等の指導のために、母校(出身高校)に来た際には、支部として激励金を出すなどの支援をしている。

また、愛知県の教員をめざす筑波大学の学生のための指導、助言を行っている。

③ 県内会員への支援

県内4地区(名古屋、知多、西三河、東三河)、および愛語会(国語)、茗友会(体育)、茗友若手勉強会、茗水会(水泳)、茗柏会(柔道部)などに対して、講師派遣などの支援を行っている。

【千葉支部】

千葉県では、毎年、総会開催日に同窓生を講師として教育事情に応じた公開講演会を実施している。

また、若手同窓のネットワークを構築するために「青桐会」を組織し、研修会を開き、会報を発行したり、名簿を作成するなど、独自の活動を展開している。

支部として企業関係者にとっても魅力ある茗溪会にすることに取り組んでいる。

【山梨支部】

支部活動の柱として、支部総会とは別に、毎年11～12月に「教養講演会」を開催している。担当者の「何とかして支部活動に人を集めたい。」との思いから、多くの困難を乗り越えて、これまで継続的な開催を行ってきた。

講師の依頼や広報活動は、本部および地元のマスコミ等の協力を得て実施してきた。その結果、平成22年にはNHK甲府放送局アナウンサー、平成23年には山梨県出身の筑波大学の清水一彦副学長や守屋雅彦教授を講師として招き、教養講演会を開催することができ、参加者の数も最低40～50名を越える多くの人が集まり、支部活動にも弾みがついてきている。

組織づくりの推進

【茨城茗溪会】

教職員以外の会員拡大計画による組織強化

昭和60年頃、教職員だけの支部のあり方を見直し、それ以来、教職員以外への会員拡大を含めた組織強化を進めてきた。

- ・教職員の会員把握は、今後も継続する。
- ・県庁では、課長クラスの人物を中心に同窓生の組織化を進めている。
- ・企業としては、同窓生の多い常陽銀行の組織化が比較的早く進んでいたが、他の企業でも同窓生の発掘に努め、企業内の組織化を進めている。

【東京都支部（仮称）】

これまでの東京の組織は、区単位になっていたが、勤務先所在地を支部とすることが原則であったために、転勤などによる所属支部変更が重なり、また同窓の教員の減少も影響して、各支部とも活動が十分に出来なくなっている。そこで、茗溪会組織委員会（委員長・高野力理事）では、本部から各支部長に対して、アンケートや意見聴取、提案を何度か往復させ、情勢を分析して新しい支部改編策を打ち出すこととした。

それによれば、第一段階として、これまでの支部は残しながら、緩やかな連合組織とすることにより、活動の活性化を図ることとなった。今後は、代表世話人と世話人を選出し、事務局を設け、教員名簿の整備から手を付けて、同窓生・会員の把握・発掘に努めることとなる。また、総会・交流会などイベントを行いながら、新しい組織化に向けて活動することとなった。

以上、紹介した活動のほかに「北海道」「埼玉」「山梨」「静岡」「岐阜」「大阪」「富山」等の地域・職域では、公開講座、文化講演会等を開催し、積極的な活動をすすめている。

絆を求めて

勤務の都合から未知の土地に転勤することになり、その土地の鉄道の駅に降り立ったら、待ち受けてくれた人から「同窓の者」だと紹介されました。初対面の人に出迎えられ、驚くやら嬉しいやら……。

よく話を聞いてみると、その実は、私がその地に転勤することを事前に知った私の友人が、当地の同窓に出迎えを頼んでおいたからの出来事だったので

『1・5・GO作戦』を推進しよう

以上述べてきた、学生への支援、各支部活動等への助成に必要な資金を得るために、「茗溪フェロー」への寄付金をお願いを、本誌春号に添付しました。よろしくご協力のほどをお願いします。

なお、このキャンペーンを、『1・5・GO作戦』と銘打ちました。このタイトルは、キャンペーンの推進にあたり

- ・5%の会員増
- ・5%の収入増
- そして――

・5%の経費削減をめざすことを年間目標として頑張ろうというみんなの「合言葉」です。よろしくご理解の上、積極的なご協力をお願いします。

また、『茗溪』誌上の広告スペースを拡大し、新たなスポンサーの開拓を図ろうと考えておりますので、この点に関しまして、ぜひ、お力添えをお願いします。



学 長

永田 恭介 (ながた きょうすけ)

- 【前 職】筑波大学学長特別補佐 学長補佐室長
【専門分野】分子生物学
【研究テーマ】ウイルスと真核細胞のゲノム/クロマチンの複製と転写の分子機構、
ウイルスの増殖と病原性発現の分子機構、
細胞周期制御と細胞がん化の分子機構
【学 歴】1976年 東京大学薬学部薬学科卒業
1981年 東京大学薬学研究科博士課程修了
【学 位】1981年 薬学博士 (東京大学)
【職 歴】1985年 国立遺伝学研究所分子遺伝研究系・助手
1991年 東京工業大学生命理工学部・助教授
1999年 東京工業大学大学院生命理工学研究科・助教授
2001年 筑波大学基礎医学系・教授
2004年 筑波大学大学院人間総合科学研究科・教授
2010年 筑波大学学長特別補佐兼務
2011年 筑波大学医学医療系教授



学長 永田恭介

国立大学法人筑波大学の
新執行部が発足しました。

副学長・理事：教育担当

阿江 通良 (あえ みちよし)

- 【前 職】筑波大学副学長
【専門分野】スポーツバイオメカニクス
【学 歴】1980年 筑波大学大学院体育科学研究科博士課程修了
【学 位】1982年 教育学博士 (筑波大学)

副学長・理事：研究担当

三明 康郎 (みあけ やすお)

- 【前 職】筑波大学数理物質系長
【専門分野】高エネルギー原子核物理学
【学 歴】1982年 大阪大学大学院理学研究科博士課程単位修得退学
【学 位】1982年 理学博士 (京都大学)

副学長・理事：学生担当

清水 一彦 (しみず かずひこ)

- 【前 職】筑波大学副学長・理事 (総務・人事担当)
【専門分野】教育制度学
【学 歴】1980年 筑波大学大学院博士課程教育学研究科単位修得退学
【学 位】1997年 博士 (教育学) (筑波大学)

副学長・理事：財務・施設担当

吉川 晃 (よしかわ あきら)

- 【前 職】内閣府大臣官房審議官
(科学技術政策・イノベーション担当)
【学 歴】東京大学法学部

副学長・理事：総務・人事担当

東 照雄 (ひがし てるお)

- 【前 職】筑波大学副学長・理事 附属学校教育局教育長
【専門分野】土壌環境化学
【学 歴】1975年 九州大学農学研究科修士課程修了
【学 位】1982年 農学博士 (九州大学)

副学長・理事：企画評価・情報担当

大田 友一 (おおた ゆういち)

- 【前 職】筑波大学システム情報系教授
【専門分野】知能情報学
【学 歴】1977年 京都大学大学院工学研究科博士課程単位修得退学
【学 位】1980年 工学博士 (京都大学)

副学長・理事：医療担当 附属病院長

五十嵐 徹也 (いがらし てつや)

- 【前 職】筑波大学副学長・理事 附属病院長
【専門分野】内分泌代謝学
【学 歴】1973年 東京大学医学部医学科卒業

副学長：国際担当

BENTON Caroline Fern (キャロライン・ベントン)

- 【前 職】筑波大学ビジネスサイエンス系教授
【専門分野】ビジネスとイノベーション戦略
【学 歴】1994年 筑波大学大学院修士課程経営・政策科学研究科修了
1997年 東京工業大学大学院理工学研究科博士後期課程修了
【学 位】1994年 修士(経営学)(筑波大学) 1997年 博士(学術)(東京工業大学)

副学長：附属学校教育局教育長

石限 利紀 (いしくま としのり)

- 【前 職】筑波大学附属学校教育局次長
【専門分野】学校心理学、カウンセリング、異文化間心理学
【学 歴】1985年 米国・モンテパロー大学文理学部
1990年 米国・アラバマ大学大学院博士課程教育心理学研究科修了
【学 位】1986年 M. A. アラバマ大学 1990年 Ph. D アラバマ大学

茗溪会では、顕著な社会貢献活動を行う一般社会人、特に青少年を対象とした顕彰事業が10年を経過し、これを機会に顕彰名を「茗溪賞」と致しました。

筑波大学生・大学院生に対する「茗溪賞」は、従来からの芸術系学生の優れた卒業制作に贈る賞に加えて、平成24年度から新たに、大学院在学中に研究や勉学の成果を生かして優れた社会貢献活動を行った大学院修了者を対象に、各専攻から推薦をいただき顕彰することとなりました。

両義性

芸術専門学群

澤田 麻実



作品で描いた象は実家の近くにある市営の動物園にいるアジアゾウです。かなり高齢の象で私が小さい頃からずっとこの動物園にいます。卒業制作の題材に悩み、実家に帰り散歩しながらモチーフを探していた時、この象がふと目に入

芸術系学生対象

平成24年度の芸術専門学群卒業生・人間総合科学研究科芸術専攻修了者対象の「茗溪賞」は次の3名が受賞しました。

作品写真はグラビアページ参照

【芸術専門学群】

日本画「両義性」

澤田 麻実(美術専攻・4年)

【芸術専門学群】

総合造形「ルーシーの後ろ髪」

成田 敬(構成専攻・4年)

【博士前期課程】

彫 塑「北の文様」

川村さやか(芸術専攻彫塑領域(2年))

筑波大学生・大学院生に贈る「茗溪賞」

大学院生対象

大学院修了者対象の「茗溪賞」は次の36名でした。()は専攻名

江角周子(スクールリーダーシップ開発)／中島朋(教科教育)／中村孔一(特別支援教育)／小田桐奈美(文芸・言語)／早川公(国際政治経済学)／坂田章吉(企業法学)／高森厚太郎(法曹)／清水宏悦(国際経営プロフェッショナル)／橋本真太郎(数学)／古賀寛尚(数学)／藤沼大幹(物性・分子工学)／川畑公輔(物性・分子工学)／村田晃一(物質・材料工学)／飯田マリ(社会システム工学)／柴沼佑次(経営・政策科学)／高橋里司(社会システム・マネジメント)／水本佑樹(リスク工学)／崔唯爛(リスク工学)／井上誠(知能機能システム)／善甫啓一(知能機能システム)／那波悟志(構造エネルギー工学)／笠原天人(地球科学)／高橋陽佑(生物資源科学)／渡辺儀一(スポーツ健康システム・マネジメント)／彼谷直子(生涯発達)／中村恵子(生涯発達科学)／曹蓓蓓(教育学)／池谷美衣子(教育基礎学)／平野美沙(心理)／西村多久磨(心理学)／朴賢璘(感性認知脳科学)／根本みゆき(スポーツ医学)／白井祐介(体育科学)／苅山靖(コーチング学)／嶋真史(芸術)／三津石智巳(図書館情報メディア)

素材としての現象

芸術専門学群

成田

敬



私は大学1年から4年までプロダクトデザイン領域、陶芸領域、総合造形領域、総合造形領域と様々な領域に所属していました。デザインとアートの中間に興味があり、様々な領域に所属し制作に励んできました。ある程度の所属変更が可能な筑波大学芸術専門学群ならではの多岐にわた

り考えた方に触れられた事が貴重な経験になっています。また2、3年の頃からライトアートに興味を持ち、光を使った作品を作っていました。その光というものによる造形を通して自分は素材として現象を選ぶようになりました。

今回の磁力を用いた作品も、形のない現象を一時的に可視化させる事で新しい造形の形が生まれてくるのではないかと試みです。

私が制作にあたり考えた事は、最新のテクノロジや新素材を使った造形や構成ではなく、誰もが知っているような現象、道具による空間構成です。より日常に起きている現象を用いて空間を構成し、人に何かしらの感情や思考の変化を起こす事ができればと考え制作をしています。

生まれ持った環境への感謝

人間総合科学研究科芸術専攻

川村さやか



筑波大学に進学したことにより、芸術だけでなく様々な分野の人や価値観に多く触れる機会に恵まれました。そのことが、それまで特に気にしていなかった自身のルーツを振り返るきっかけとなり、生まれ持った環境への感謝、先祖代々の末端であることに対する自覚などが修了研究として制作した本作品のテーマとなりました。

作品《北の文様》は、脱活乾漆技法による着衣像です。自身のルーツであるアイヌ民族の文様を取り入れ、切っても切り離せない生まれ持った環境などを着衣で表現しようと試みました。文様部分に用いた卵殻蒔絵は、卵の殻を一枚一枚貼り付けていく主に漆芸で用いられる技法です。

アイヌ民族が一針一針想いを込めて刺繍を施した文様を、現代人である私が安易に作品に取り入れて良いものかと悩みましたが、少しでも当時の記憶に触れることができたならという思いで、先人に対し敬意を込めて制作しました。

第17回 茗溪・筑波 グランドフェスティバル 開催

日時 平成25年1月26日(土)
午後1時30分
場所 筑波大学学生会館
学生会館レストラン



実行委員長 新井達郎氏



乾杯の音頭をとる阿江通良氏と題字「情」



茗溪・筑波グランドフェスティバルと 題字「情」

茗溪・筑波グランドフェスティバルは今回で第17回を数え、2013年1月26日(土)に筑波大学学生会館で開催されました。筑波大学の在学生、卒業生、修了生、教職員、東京教育大学をはじめとする前身校の卒業生、修了生の皆さんが、交流を深める良い機会になるよう学生を中心に議論を進め、企画運営にあたり、当日の学生スタッフからも多大な協力を受けました。当日の参加者は在學生、同窓生、教職員などを含めて約150名でした。

本フェスティバルは、筑波大学と前身の東京教育大学など諸学校・大学の卒業生・修了生などが、世代を超えて交流し、親睦を深め、同窓の輪を拡げることを目指して毎年1月を中心に開催されるようになったものです。

第7回大会までは、大塚キャンパス、茗溪会館を中心として東京地区で開催され、第8回大会からは筑波大学と東京地区の隔年開催になっていました。その後、総合交流会館のオープンやつくばエキスポプレスの開通などがあり、筑波大学での連続開催に関して、関係者のご協力が得られたため、第12回大会からは筑波大学開催として本年の第17回大会も引き続き筑波大学で開催致しました。

茗溪・筑波グランドフェスティバルは、各年度、1字のテーマ字を選び、それを核にして、フェスティバルの成功を期して、シンポジウムや懇親会を行い、同窓生の交流と発展を願ってきました。例えば、13回では、環(まわる意味)、14回は楽(たのしむ)、15回は想(おもい)、前回16回は醸(かます、醸造)でした。

今回は、筑波大学生や関係者と同窓生との世代を超えたつながりをテーマに「情」(なげ、情報)に込めると共に、人と人とのつながりと情報活用の重要性を、講演・パネルディスカッションのテーマを通して考えてみたいと思われました。

テーマ「情」は、情報、感情、なげなどの意味を持つ題字です。人と人との繋がりは瞬間的に形成される場合もありますが、本来は、徐々に形成されて本物の繋が

りになっていくものであり、そこに、情が関係すると思われる。そのようなことを考える場を提供するような意味を込めています。

また、このグランドフェスティバルを核にして、共に楽しみ協力するための同窓会組織として発展させていけることを考えて、筑波大学と茗溪会および関連する方々の想いを、このテーマ字に込めました。



筑波大学学生会館にて

当日は13時から受付を開始し、13時30分から講堂でオープニングセレモニー、14時からシンポジウムを開催しました。オープニングセレモニーの終了後筑波大学のメッセージソング「IMAGINE THE FUTURE」の合唱がありました。なお、この、メッセージソングは第14回茗溪・筑波グランドフェスティバルで基調講演して下さった同窓生コピーライター一倉宏氏が作詞されたものです。このことは、茗溪・筑波グランドフェスティバルの場が新しい同窓生の絆を深める良い機会であったことを示す象徴的な出来事です。本年は、シンポジウム終了時に筑波大学の学生歌「常陸野の」の歌唱指導がありました。





オープニングセレモニー

オープニングセレモニーでは、最初に、大会会長である山田信博筑波大学学長の代理で清水一彦副学長・理事からご挨拶があり、その後、茗溪会理事長の江田昌佑氏から同窓会を代表してご挨拶をいただき、最後に、実行委員長の新井達郎より企画の説明と支援に対する謝辞を申し上げます。その後、江田茗溪会理事長から清水副学長に援助金の贈呈がありました。本フェスティバルの第1回は中村良三先生を中心に発案され、1996年に東京で、懇親会を主にして、立食パーティー形式で開催され、その後、講演会も含めた懇談に変わりながらも今回第17回を迎えるまで学生諸君の企画力と運営力に支えられ続けてくることができたことなど紹介がありました。また、長年にわたり茗溪会からの援助金の贈呈や各種支援をいただいていることなどについてオープニングセレモニーでも紹介がありました。



シンポジウム

シンポジウムでは、基調講演としてオリンピック委員会選手強化本部常任委員も務められている勝田隆筑波大学客員教授(スポーツR&Dコア主幹研究員)が、「情報社会の品格」スポーツから『みる』情報リテラシー』と題して、スポーツの最前線でご指導されている同教授



懇談会にて

の経験に基づいた講演をしていただきました。引き続き行われたパネルディスカッションでは、勝田教授に加え、手塚太郎准教授(図書館情報メディア系)、独立行政法人日本スポーツ振興センターの平野加奈子氏をパネリストにお迎えし、また、真田久体育専門学群長に司会をお願いし、スポーツの現場における情報戦略の在り方、情報の取捨選択、情報を扱う上での留意点など、話し合っていたいただきました。新しい視点を感ぜさせていただいた基調講演、パネルディスカッションは、あつと言う間に、終わってしまったという印象を受けました。講演後、いくつか会場からも質問やご意見をいただきました。シンポジウムは、会場と一体となった、有意義な時間で聴衆は大いに満足されていたようでした。



懇親会

懇親会は大学会館において16時30分から開催され、参与の江田昌佑茗溪会理事長のご挨拶につき、鈴木副学長のご挨拶があり、また、5名の関係者による鏡開き、阿江副学長の乾杯などのあと、世代を超えた交流を楽しみました。余興として、筑波大学応援部WINSのパフォーマンスが披露されました。その後、恒例の宣揚歌「桐の葉」を応援部WINSの指揮のもと全員で斉唱し、学生委員と実行委員や関係者の紹介、学生委員と学生委員長の挨拶があり、最後に実行委員長がお礼の挨拶を致しました。その後、筑波大学と茗溪会の発展と来年の再開を約束して散会となりました。

今年も、筑波大学の学生や先生方、茗溪会理事の方をはじめとする同窓生や卒業生の方々など、シンポジウムのはじめから懇親会終了まで、多くの方が帰らずに交流を深められている様子が見受けられ、その意味でも、極めて有意義な会であったと思われまます。世代を超えて交流されていた様子も見受けられました。

例年のように懇親会場に学生さんに書いていただいた題字を掛けておりましたが、大変好評でした。



あわりに

今回の茗溪・筑波グラウンドフェスティバルについては、6月当初に、今年から実行委員長を学群長の持ち回りで行っていくとの方針を当時の学生担当副学長から伝えられ、私も、4回連続して実行委員長をつとめて肩の荷がやっとおりたと思っておりました。しかし、9月頃になり、調整が遅れているので、このままでは、今年度の開催が危ぶまれる状況であるので、是非にも、もう一回実行委員長をつとめて欲しい旨の依頼を受け、これまでの交流を中止するのは忍びなかつたため、心ならずも引き受けざるを得なかつたのが、今年度の実情でした。ただ、関係する、学生諸君や、事務方、実行委員のご協力により、なんとか開催にこぎつけバトンを次回につなげることでできて良かったと思っております。

本フェスティバルは、1年で一番寒い時期に開催されますが、第17回大会も出席者の方々から好評をいただき、今後とも発展させて行くように激励をうけました。これもひとえに関係され、陰に陽にご援助ご協力いただきました関係各位のおかげです。

とりわけ、山田信博学長並びに筑波大学本部の皆様方、江田昌佑理事長をはじめとする茗溪会の皆様方、大学会館の職員の皆様、教職員各位、紫峰会の職員の皆様方からは、物心両面のご援助とご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。筑波大学と茗溪会の架け橋として本フェスティバルが、益々発展し、同窓生の交流に役立つことを期待しております。また、グラウンドフェスティバルを筑波大学と同窓生の交流の場としてさらに発展させていくことが出来ますよう、皆様方の一層のご支援をお願い致します。筑波大学の在校生と卒業生、前母校の同窓生がともに語らい、写真を撮り合い、交流を深める場として喜んでご参加いただいていることを目のあたりにして、このような会の継続の意義を改めて認識いたしました。

第17回茗溪・筑波グラウンドフェスティバル実行委員長 新井達郎

茗溪会の公開講座から

この春から楽しむ

ガーデニング

講師 水戸市植物公園長

西川 綾子 (茗溪会理事)

平成25年2月16日(土)に、ガーデニングをテーマに茗溪会館で講座を行ったのでその様子を報告します。

私が茗溪会で行う初めての講座だったので、どんな参加者が集まるのか見当が付きません。園芸初心者の方を促すため「この春から楽しむガーデニング」というわかりやすいタイトルを選び、かつ今一番人気があるクリスマスローズをテーマにすることで、園芸ファンが集まるように工夫しました。

広報は、事務局が文京区をはじめ都内図書館などにチラシを配布し、私も東京都神代植物公園などにチラシの掲示や配布を依頼しPRに励んだ結果、定員40名に対し60名近くの参加者があったのは喜ばしいことです。

園芸講座は「まあ綺麗！やってみたいわ」とやる気させるのがポイントです。当日は主人に手伝ってもらい早春の花を使った美しい寄せ植えや実習セットなど、できるだけ多くの草花や園芸資材を水戸から運びました。さて開始時間が近づき、参加者が集まってきました。いかにもガーデニングが大好き！という女性を中心でしたが、私が所属していた園芸研究室の先輩も参加して下さり、ありがたく思いました。

最初の1時間はパワーポイントで画像を中心に話を進め、休憩をはさんで実際に植物に触れる実習を行い、質疑応答で終了、の予定をたて、いよいよ開始です。

「クリスマスローズを育てている方、手を挙げて下さい」と尋ねると、前に着席している女性の多くは栽培経験者で、かなりの園芸ファンようです。クリスマス

ローズの魅力や栽培のポイントのほか、職場である水戸市植物公園や、市内にある英国庭園に花を咲かせるプロジェクトを筑波大学と行っている様子などを画像で紹介しました。画像中心の講義は、受講生は聞くだけになるのでどうしても眠気を誘います。休憩時間をはさんで、ようやく実習を行います。

◆人気が高い実習

今回のテーマであるクリスマスローズの原産地は、夏が涼しくて雨が少ないため、日本で栽培する場合は、夏に少しでも涼しいように落葉樹の側に植えたり、排水をよくするため高畝にした所に植えるなどの工夫をすることです。夏の光が強くて葉が茶色く焼けてしまっても大丈夫。中央部分の花芽となる部分を守るため、葉が傘のように茂ります。花芽が確認できる12月ころになると葉は周囲に広がって、蕾に光が当たりやすくなります。植物自身も工夫をするのでしゅうね。この古い葉を切つて花芽に少しでも光が当たるようになれば、花は伸び伸びと咲くことができるようになります。

もし葉を切らないと風通しが悪くなって、蕾にカビが生え、せっかくの蕾が腐ることもあります。蕾を日陰にしてしまう葉があれば切つて整理すれば、花はそろって咲き、葉の新旧交代にもなります。この時大切なことは



西川綾子 氏

切つてもすぐ次の葉が出てくるくらい元気な株に育てていることと、肥料をあげることです。弱々しい株で、肥料が少ないと、元気が良い芽がでてきません。まず実習前に、これから葉を切った方がよい蕾があがってきた株を観察してもらうため、鉢を持って参加者の間を歩きました。

「では、実際に葉を切ってみましょう。やってみてみたい方はいますか？」と尋ねると、希望者が多くいました。ただハサミで葉を切るだけなので、5分もあれば終わるだろうと思っていました。参加者の中で何センチ切るか？そんなに切つてしまうのか、意見が飛び交い、説明しても聞く耳持たず状態になったのはビックリでした。

今回の参加者は「古い葉を切る」ことを知っている園芸知識の豊富な方が多く、その言葉は暗記していますが、なぜ切るかまで考えているのか、と疑問を感じました。葉を切るだけでけっこう時間を使ってしまう、メインの寄せ植え作りを行う時間がなくなりました。こんな質問攻めにあうのでは、終了時間が遅くなるのが懸念されたので、それこそ植えるポイントだけを話すことにしました。持ってきた資材の紹介をした時、水戸の講座でよく使うアンティークなプラスチック鉢を紹介しました。見るのが初めての方が多く「ほら、軽いですよ。」と皆さんに鉢を持たせると「まあ軽い。こんなの売ってないわ」と好評でした。都内にいる方がガーデニング資材を求めるのが難しいのか、と私の方が驚いたくらいでした。

◆最後に質問攻めに

70分のうち最後の10分くらいを、質疑応答の時間に行いました。かなり勉強熱心な方が多いようにみえましたので、ここで時間をかけると終了時間が遅くなってしまいます。そこで「よっぽど皆さんの前で質問したい方がいらしたらどうぞ。終了してから側に来て下されば、直接お答えします」と問い掛けたら、この時に手を挙げる方

はいなく無事に終了しました。と思いきや、直後に多くの女性が次々とやってきて、植え方の質問や他の花についての園芸相談など、あらゆるジャンルの質問攻めにあいました。

私の場合、園芸講座の要望は多く、けっこう各地で講演会を開いてきましたが、こんなに熱心に質問を受けたのは初めてかもしれません。さすが文教地区の文京区、参加者の意識が違い、学習している方が多いようですが、今回の参加者の反応を見て思ったことは、ひょっとすると実習をする講座を今まで受けた事がないのかもしれない。挿し木や株分け、花壇作りなど、身体を動かす実習教室を行ったら、もっと喜ばれるかもしれませんが、あまりの熱心さに、私は水戸になかなか帰れないかもしれません。

◆大学で学んだことを講座に活かす

私が園芸関係の原稿を書き始めた頃、まだ自分の原稿に自信がなく、よく恩師に指導をいただいていた。「最近の園芸書はこうしなさい、とは書いていないが、なぜこうするのか理由が書いていない。理料的なことにも触



実際に作業をしてみる



受講する人びと

れながら、あなたしか書けない原稿を書きなさい。」と言われたことを思い出しました。

私が大学で教わった農学は実学です。机上の理論だけではなく、実際に役に立たなければ意味がありません。ただ花を植えれば良いという講座ではなく、なぜ今、この作業をどのように行うのか、理由を話すことが大切です。理由がわかれば、一つではなく多くの栽培方法が考えられます。植物を育てる環境は自宅によっても違うし、用土の配合で水はけも保肥力も違います。「この方法じやないといけない」ということは、園芸にはないので、最後は自分で判断し、自分にあった方法をみつけることです。

先生や先輩方から「教育と研究の両立」の言葉をいつも聞かされ、学生時代に理論と実習を学ぶ教育を受けられたおかげで、今こうして多くの人に指導をすることができるようになりました。あらためて筑波大学で学べた良かったと感謝し、今後多くの皆さんに喜んでいただけるようなアドバイスをしていきたい、と感じた講座でした。

第28回教職受験対策研修会から

教職を希望する筑波大学生・大学院生に対する「教職受験対策研修会」が3月11日から13日までの三日間、37人が参加して筑波研修センターで開催された。

【第一日】*開講式 筑波大学のキャリア支援室長・就職課長などからご挨拶や励ましのお言葉をいただいた。

*講義Ⅰ「教員採用試験の分析と対策」 神奈川工大顧問 清水進一氏(43歳)から「採用試験の概要と受験対策について」を、豊富な資料に基づき詳しく説明していただいた。

*採用試験合格者体験発表(今年度合格した先輩)

- ① 東京都 中高(国語) 村上菜々望さん(人文学群)
- ② 茨城県 高校(数学) 近藤 慎さん(理工学群)
- ③ 茨城県 高校(数学) 三津 山央さん(理工学群)
- ④ 茨城県 高校(国語) 成毛 美帆さん(人文学群)
- ⑤ 茨城県 高校(国語) 成井 宏さん(人文学群)

*論文作成および面接について高原が要点を説明した。
*論文作成 80分で作成した。

【第二日】*講義Ⅱ「我が国の教育の今日的な課題」

東海大教授 佐藤徹氏(46歳) 教育の国際化の初等中等教育への影響。教育接続の考え方は日本の教育にどのような変化をもたらしつつあるかなど。

*個人面接 学生宿舎所長の高野大二郎氏(40体)と高原が面接官となり実施。村上さんを除く体験発表の4人に加えて、奥山有紀さん(平42社工卒 今年度東京都の中高 社会合格)がチューターとして加わり、合計5人が受講生に個人面接の答え方をアドバイス。

*集団面接 受講生数人のグループに対して面接を実施した。ここでも5人のチューターがアドバイス。

【第三日】*集団討論 数人で用意されたテーマについて70分間ほど討論。まず、各人が与えられたテーマについて意見を述べ、討論に入った。ほとんどの参加者が始めての経験であったが議論が白熱した。

*論文指導 初日に書いた論文を本人が読み、感想を述べ、最後に指導者がコメントをするという形式で実施。その後、閉講式を行い予定どおり研修会を終了した。

茗溪会事務局 高原 将(38歳)

第12回「顕彰」候補者の推薦依頼について

茗溪会が主催する顕彰事業は、茗溪創基130周年を記念して始められた公益事業です。平成25年には第12回を迎えます。

顕彰対象は、地域社会にあって広く社会に貢献している青少年や一般社会人とします。今回も、顕彰候補者を広く全国的な視野から積極的に発掘し、下記の要領により推薦して下さい。

ただし、公益事業としての趣旨から、政治家、現職の公務員等は避けるほか、現在、本会の本部、支部等の役職に在る者は対象外とします。なお、本会会員であって役職にあるものでも、その社会貢献の実績が、社会的に評価されている場合は、候補の対象から除かないものとします。

昨年度からは、従前の、筑波大学の芸術関係学生への顕彰に併せて、社会貢献を進めている大学院生で、大学当局から推薦された大学院生等も対象にしました。

また、社会的客観性を高めるために、当該地の教育委員会、新聞社(支局等を含む)、放送局あるいは関係団体、有識者、本会会員の提案、参考意見等を積極的に求めてください。

- (1) **顕彰対象** 社会貢献活動功労者、芸術創造活動(作品)者等。
- (2) **推 薦** 全国の代議員、支部長(会長)、本部理事等から候補者を推薦する。推薦にあたっては、世代、地域、職域、あるいは、学内にあっては芸術、スポーツ、また、社会貢献度、研究成果等を考慮する。
- (3) **選 考** 一般の社会貢献者は、推薦された候補者の中から、選考委員会において顕彰対象者を選考する。選考委員会は、当該担当の副理事長を座長とし、理事会内に設けられている各委員会の委員長を内部委員とし、理事長が委嘱した有識者を外部委員として構成する。
なお、筑波大学生、大学院生に関しては、学内に設置された選考委員会の結果を尊重する。
- (4) **推薦締切** 一般候補者の推薦締切は、平成25年9月末日、学内締切は平成26年2月末日として、関係書類を本部事務局へ提出してください。
- (5) **顕彰式等** 一般顕彰者を本部に招いて、顕彰式、祝賀会を行い、大学関係者は学位授与式等に併せて行う。また、顕彰者の推薦記録等を中心に記載した“顕彰録”を作成して、本人を始め、国会図書館等の関係方面に贈呈します。一方、顕彰受賞者の社会貢献活動の概要や本人の横顔等を、季刊誌「茗溪」へ掲載して、広報・周知を図ります。

全国大学ラグビー選手権大会筑波大学準優勝 公開講座(基調講演と資料展示企画展)開催

主 催：茗溪会 共 催：筑波大学 協 力：茗溪学園、筑波大学ラグビー部・OB会

1. 資料展示企画展

期 間：第1期・4月20日(土)～4月30日(火)

第2期・5月11日(土)～6月2日(日)

毎日、午前10時から午後4時までご覧いただけます。

なお、閉館中の5月1日(水)～5月10日(金)を除いた期間は無休です。

2. 公開講座(基調講演とパネルディスカッション)

テ ー マ：「茗溪ラグビーに期待するもの」

日 時：平成25年5月11日(土) 午後2時から

場 所：東京・茗溪会館

基調講演：講 師 江田昌佑氏(一般社団法人茗溪会理事長)

パネルディスカッション：

パネラー 中川 昭氏(筑波大学教授)ほか

司 会 伊与田康雄氏(筑波大学名誉教授)

「企画展」には、お誘い合わせの上、ふるってご観覧ください。お待ちしております。

平成25年度 一般社団法人茗溪会 公益、共益、広報等 年間事業計画(案)

1. 公益事業

(1) 公開講座

① 東京地区

(その1) 日時：未定 会場：東京・茗溪会館 講師：藤原保明氏 テーマ：英語シリーズ

(その2) 「基調講演と企画展」：オープニングセレモニー 基調講演 企画展

日時：第一期 4月20日(土)～4月30日(火) 第二期 5月11日(土)～6月2日(日)

テーマ：「筑波大学ラグビーのこれまでと今から」 講師 筑波大学教員ほか

(その3) 日時：未定 会場：東京・茗溪会館 講師：西川綾子氏 テーマ：「秋を楽しむガーデニング」

② つくば地区

(その1) 日時：未定 会場：つくば・筑波研修センター 講師：藤原保明氏 テーマ：英語シリーズ

(その2) 日時：未定 会場：筑波大学学生会館(予定)

講師：筑波大学教員、茗溪会理事等の中から委嘱 テーマ：未定

※公開講座のあらまはは、季刊誌「茗溪」に掲載の予定。

(2) 顕彰(第12回)

① 対象 国内外で、継続して社会貢献(人材育成を含む)活動等を行い、その実績、成果を上げている団体、個人を対象とする。筑波大学学生・大学院生も含む。

② 対象者の選定

社会貢献活動に関しては、9月末日までに、推薦候補者を、各支部、本部理事等を通じて公募し、平成26年10月に開催を予定する選考委員会で選考した結果について理事長の承認を得る。11月に行う顕彰式で該当者に「茗溪賞」を贈る。一方、筑波大学生、大学院生については、学内に置かれた選考委員会で選考した対象者について理事長から承認を得る。

(3) 支部等主催の公開講座、後援会の共催、助成。

2. 共益事業

① 筑波大学学生生活動等への支援強化。

② 世代間や各支部等(地域、職域)をつなぐ活動の充実強化、推進。

③ 会員相互の交流の推進。～グランドフェスティバル共催。賀詞交換、暑中見舞い等の名刺広告を季刊誌「茗溪」へ、名刺広告スタイルで掲載。

(1) 追悼のつどいの開催

日程：9月中旬を予定 会場：東京・茗溪会館

脱・宗派として開催し、遺族、関係者を招き、逝去された会員等の遺徳を偲ぶ。

(2) キャリア情報等の講座の開催

① 9月～3月の期間に8回程度、筑波大学との共催で実施。

② 3月中の3～4日間で「教職受験対策研修会」の企画、実施。

ただし、個人負担分の受講料のうち、一部を茗溪会が助成。

※今後の課題－教職分野の開拓。

3. 広報事業

(1) 季刊誌『茗溪』の発行

会員の期待に応える情報提供に努めるとともに、一般市民による茗溪会への一層の親近感を醸成し筑波大学等からの“知”の還元を図る。

① 特集、会員関連記事。特集記事は、内外の話題性のあるテーマ等を設定。

② 発行時期 春、夏、秋、正月の4回を予定。

(2) 茗溪会 HP 4月からリニューアル

「科学的に考えることの大切さ」をテーマに



教育行政の現場にあって、現代の子どもの、科学への関心の低さ、自然体験の少なさを痛感する中で、子どもたちが「科学的に考えること」をどのよう
にして育てるかを考える。

清原 洋一 (54歳 自60筑博物)

文科省初等中等教育局教科調査官
国立教育政策研究所教育課程調査官

私は、現在文部科学省内にある国立教育政策研究所の教育課程調査官、そして、初等中等教育局教育課程課教科調査官も併任しています。もともとは、高等学校で教鞭をとっており、その後、教育研修センター勤務を経て、現在に至っています。

仕事の主な内容は、以下のように学習指導要領関連、理科教育に関する調査、理数教育の推進についてです。

*

本誌前号で、社会の第一線で活躍する筑波大学の卒業生が、それぞれの仕事の現場で頑張っている姿を、「夢」をもって「翔る」というテーマで紹介しましたが、本稿はその続編です。仕事の将来の可能性とか社会への貢献とかの夢を語っていただきました。

今回は、文科省教科調査官として理科教育の推進に夢をかける清原さんが語ります。

- 学習指導要領理科(中学校、高等学校)に関わること
- ・指導要領の改訂(今回、理数教育の充実)
- ・趣旨の説明や参考となる資料の作成など
- 理科教育に関わる調査
- ・全国学力・学習状況調査(理科)
- ・理科に関わる国内の調査・研究
- ・教育課程実施状況調査(学習指導要領実施状況調査)、特定の課題に関する調査
- ・国際学力調査(PISA、TIMSS)など
- 理数教育の推進事業へのアドバイス
- ・スーパーサイエンスハイスクール
- ・科学の甲子園
- ・科学の甲子園ジュニアなど

* 平成24年度から始まった中学校及び高等学校の理科の学習指導要領は、「理数教育の充実」という状況の中での改訂でした。

「知識基盤社会」「グローバル化」といわれるような時代に対応していくために、次代を担う科学技術系人材の育成がますます重要になるとともに、科学技術の成果が社会全体の隅々にまで活用されるようになっていく今日、一人ひとりの科学に関する基礎的素養の向上が求められています。そこに着目されるようになってきたきっかけの一つとして、PISA、TIMSSなどの国際学力調査の

結果への反響がありました。また、スーパーサイエンスハイスクールをはじめとして、生徒の科学的な好奇心や学習の意欲を高め才能を伸ばしていく取組みも、ここ10年くらいの間に盛んになりつつあります。こうした状況下で仕事ができているということに、感謝しています。

このような仕事を通して、これからの社会を担う子どもたちが、科学的に考えることの大切さを認識し、それを楽しむことができるようになること、そんな教育の充実ができたらしめながら仕事をしています。

教科調査官として講演する清原氏



心を豊かにします。自然の事象に疑問をもち科学的に考えるということも面白いものがあります。人は、それぞれ様々な生き方や考え方もあって生きており、その中で人生を楽しむことができると感じます。

また、人生の中では、様々な場面面で決断をせまられることもしばしばです。決断し行動に至るまでには様々な思考をめぐらしますが、このときに状況を冷静に見つめ、科学的に考えるということも重要なことであると思えます。

このようなことを考えながら、私なりに理科教育の充実や推進という仕事に取り組んでいます。